

関節リウマチ治療に新薬

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 28 》

手足の関節が腫れ、放つておくと関節が変形してしまう「関節リウマチ」。かつてはゆっくり進行する病気と考えられていたが、最近では、発症後早期から関節の破壊が進行することが分かってきた。県立中央病院では、新たに認可された生物学的製剤を使用し、早い段階からしっかりと病気を抑える治療を行っている。

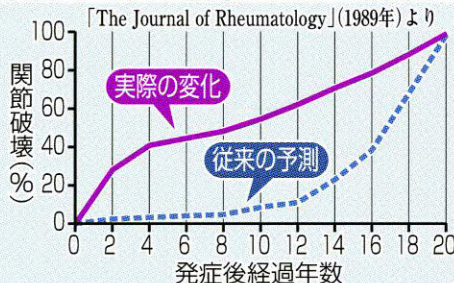
関節は滑膜という袋に覆われ、滑膜から分泌される滑液によって滑らかに動くことができる。関節リウマチは、誤って自分の細胞や組織を攻撃してしま



神崎 健仁
アレルギー・リウマチ科副科長

早期から症状悪化を防ぐ

関節リウマチの早期にみられる関節破壊



う自己免疫性疾患の一つ。炎症を引き起こす物質「サイトカイン」が大量につくられ、炎症細胞と滑膜細胞の増殖が起こり、関節全体に炎症が広がった結果、骨が破壊されてしまう。

アレルギー・リウマチ科副科長の神崎健仁医師（10月1日から診療）によると、関節リウマチの治療は薬で症状を和らげ、病気の進行を抑えることが重要だ。従来は、腫れや痛みを抑える非ステロイド性抗炎症薬やステ

ロイドから使用したが、最近では、初期から免疫の異常に対して働く抗リウマチ薬を使い、効果が不十分な場合は生物学的製剤で炎症や関節の破壊を強く抑える治療法がとられているという。

生物学的製剤には、サイトカインである「TNF α 」や「IL-6」の働きを妨げるインフリキシマブ、エタネルセプト、トシリズマブなどのほか、リンパ球の働きを抑えるアバタセプトなど6種類あり、点滴か皮下注射で投与する。間隔は週2回から2カ月間に1回までさまざまだが、いずれも医療費の自己負担は月3〜4万円に上る。アレルギー反応を起したり、感染症にかかりやすくなったりするので注意が必要だ。

神崎医師は「関節が腫れた状態のままだと破壊が進行し、臓器障害や動脈硬化につながる恐れもある」と指摘。「抗リウマチ薬と生物学的製剤を組み合わせ、早期からしっかりと治療することで（症状がない状態の）寛解を目指したいと話している」。